

何故「平和旬間」はあるのでしょうか？

それは、「わたくしたちがキリスト者となるため」と言えば、直ちに了解していただけるでしょうか？ 八月に集中する 終戦記念日、お盆、聖母の被昇天、と同じく、平和も福音の終末的完成に係わりますが、「わたくしたちがキリスト者となること」がその第一歩だと思われてなりません。

先日、ブラジルはベレン近郊のカスタニアから一時帰国中のシスターBにお会いしました。黒々と日焼けた顔は“さもありません”でしたが、少しくやつれたお姿に見入っていると、「ベレンでは四季がなく、毎日暑いんです」との一言、私なら亜熱帯の沖縄でさえ脱水症状を覚えるのに、赤道直下に365日ではもはや限界を超えています。何故神様は、気候一つにも、こんなに不平等な世界をお造りになったのでしょうか。しかも、そういう所は、とかく貧しく、飲み水にも事欠くと来ています。また、自然環境が厳しい所は、往々にして、教育、産業、福祉、文化等、社会環境も厳しいもの、「人皆神の子」「人間皆兄弟」であるのが「キリスト者である」ことの核心であるのなら、不公平はもとより、無視、排除、はては、殺戮までも敢えてする現実世界は「神の子」の世界とは全く裏腹のものと言わねばなりません。

では、「人皆狼」の世界にあって、キリスト者の真価は何処にあるのでしょうか？ 私達自身を含めて、「キリスト者でない」世界を「キリスト者である」世界と嘯^{うそぶ}いたり、どうしようもないと諦めたり、する所に道は拓けません。先ず「キリストのみ心に背く」世界を「キリスト者のものでない」と認め、だからこそ私達自身が「キリスト者となる」ことによって「キリスト者に相応しい」世界を創って行くところに「神の子」の道があるのではないのでしょうか？

私達は、神のみ旨と裏腹の世界にドブプリ浸かったままでは「キリスト者」ではありえません。でも「神の子」でも「キリスト者」でもなく、皆が皆シスターBのように出来ない私達も、み恵みに力を得て、各自に出来るところから、対価を払いつつ共に歩む道を選ぶなら、「神の子」とも「キリスト者ともなる」ことは出来るのです。そしてこれこそキリスト者の真価、八月の数日だけとは言わず、365日を「平和の日」として行きたく希います。

二〇〇三年八月

西山俊彦

(三日市・金剛・堺・橋本・泉北、各教会ニュース8月号に掲載)